

創造性の性差に関する文献的研究

A Review of the Sex-differences in Creativity

田 辺 敏 明

はじめに

創造性と言えば、産業界での発明発見や世界的に新しい学問上の理論を思い浮かべる。しかし、これらはほとんど男性によって独占されているのが現状である。それでは、男性は果たして女性と比べて、真に創造性が豊かなのであろうか。それとも、何らかの環境的要因によってそのような差が生まれたのであろうか。

さらに、創造性の定義にも種々なものがあり、それを過程としてとらえるのか、所産にのみ限定するのか、さらにはどのような領域での創造性をとらえるかによっても、多くの性差が見られると予想される。

また、男性女性という生物学的にのみ区分するだけでなく、男性性、女性性というわれわれの頭でとらえているタイプをとりあげ、創造性との関連を見てゆく必要もあろう。

本稿では、創造性及び性差の各々を、種々の観点からとらえ直し、両者の関連を追求してゆきたい。

1. 創造性と性役割嗜好

創造性と性差に関しては、従来まで種々の所見が見られる。その中でも、最もポピュラーなのが、創造性の高い者が両性的 (androgyny) という主張である。これは、Mackinnon(1962)の創造性が高い建築家が女性性役割をもつという研究報告に端を発している。しかし、この分野も両性性の考え方あるいは測定の方法により結果を異にする。両性ともにバランスがとれていることを指すのか、それとも両性ともに高い得点をとる場合にのみ限定して考えるかという問題も残る。これに関しては、男性性—女性性との関連で詳しく述べたい。

もう1つ例をあげてみよう。Lott(1978)は、園児を性に関連した色々な遊び場で自由に遊ばせ、どちらの性に合った遊び場を選択するかにより、園児の性役割嗜好 (preference) を測定し、言語的流暢性と比較している。彼によれば、その性に一致していない嗜好をもつ園児は、一致した嗜好をもつ園児より、言語的流暢性は高いと言う。この報告は、両性的な嗜好の子どもの創造性が高いことを支持する結果と言えよう。

Lottの研究より前であるが、Billier & Singer(1969)は、男児の性役割と創造性について、面白い報告をしている。彼らは、性役割を性役割嗜好と性役割志向 (orientation) に分けた場合に、嗜好が高いほど創造性も高いが、一方、志向が高くなるほど創造性は低くなることを見い出している。彼らによれば嗜好が高いことは、興味が広いことであり、それだけ視野や観点を広めることにより創造性を促す点と、志向が高いことは自分の性に合う性役割を形成しようとする自己内の圧力が強く、それが固さや偏狭さを生み、自由な思考や新しい経験に向かうことを阻むという2点から考察している。

2. 創造性と性度

創造性と性役割嗜好との研究では、嗜好という観点からも、幼児が主対象であった。では、青年期を対象とした研究では、どのような結果が得られているだろうか。このタイプの研究では、Gough & Heilbrum (1965)が作成したACL (adjective check list) を基にしたMF尺度に代表される質問紙への自己記入によって、男性度と女性度を測定し、創造性との関連を見ている研究が多い。

Harrington & Anderson(1981)は、Mackinnon が提唱した創造性と両性性との関連を確かめようとした。彼らは、大学生を被験者とし、独立した男性性と女性性の尺度を用いて、創造的自己概念や創造的所産との関連を眺めている。

彼らは、両性性に関して従来まで3つのタイプが考えられるとした。1つはバランスモデルで、男性性及び女性性の比率で両性的と判断するものであり、双方高い場合と双方低い場合の区別ができないモデルとしている。次に輻輳モデル (additive model) は、多方高い場合にのみ両性的と定義する。そして、最後に彼らの考えた相剰モデル (multiplicative model) は、男性性と女性性の相剰効果を考えたものであり、その変数として男性性×女性性を用いている。

そして、研究の結果、彼らは創造的自己概念と正の相関が見られるのは、男性性のみであり、女性性とは相関が無いと報告している。さらに、創造的所産 (創造的使用テストによる) との関係でも、正の相関が見られたのは男性性で、女性性との間には負の相関が得られたと報告している。さらに、男性性×女性性の変数も創造性との間に有意な正の相関が見られたとし、バランスモデルが両性性を表す指標として適切でないと考察している。

創造性の指標との間の相関が、男性性にのみ見られたという以上の結果は、Mackinnon の研究報告や性役割嗜好の研究とも相反するものである。それでは、なぜこのような結果の違いが現れたのであろう。

まず、最初に留意すべきことは、用いた創造性指標及び性度指標の違いである。Harringtonらは、創造的自己記述を用い、さらに性度の測定においても、Mackinnon らとは異なる指標を用いている。加えて、指標の性質からもわかるように、対象が大学生であり、かなり性役割が確定した年代という点に注目したい。大人の性役割は、動機や欲求の側面を多く含む。しかも、青年男子の性役割は、昌険心、挑戦心、攻撃欲求などの達成動機に関わるものを含んでおり、それらはそのまま創造的人格とも言えるものである。一方、女性性においては、細やかな感受性以外は、創造的人格特性に含まれないようである。

従って、量の面では、男性性役割の方が創造的人格に含まれる割合が圧倒的に多く、その面からも男性性とのみ関連が見られたのではなかろうか。しかし、創造的人格に含まれる女性性役割が少ないからと言って、女性性は創造性に関与しないと速断しても良いものだろうか。女性性役割の中でも、創造性発揮に欠かすことのできない特性もある。量だけでなく、質及び内容も見てゆく必要があろう。Suter & Domino (1975)は、創造的人格の特徴として、矛盾する要素をうまく統合すること、新しい経験に対する開放性、複雑性を認識に採り入れる傾向をあげ、そのためには、感受性、内省、自己認識という女性性を受け入れることが必要であると述べている。

創造性の過程と所産の所でも述べるが、問題解明の着眼としては女性性が深く関与し、創造的発案を所産まで高めてゆく態度には男性性の特性が関わっていると見えよう。

また、どのような領域での創造性を扱うかによっても、男性性—女性性との関連が異なることも付け加えておきたい。

従来の一般的な研究では、Guilford や Torrance の考案による創造性テストを実施し、得点の高低で創造性高群と低群に分類している。

しかし、以下のような分類の方法も見られる。Kanner(1976) は、創造的と推薦された建築家と、その建築家と2年間接触しプロの関係をもった建築家、そしてそれ以外の建築家に分類し、3群間で男性度と女性度を独立して測定したところ、創造的な建築家及び接触をもった建築家は、創造的でない建築家より女性性が有意に高いという結果を得、Mackinnon と同様な結果を示している。建築という美的センスを要する創造は、やはり感受性の豊かさや優しさ等の女性性と関連するのであろうか。創造性の発揮される領域分野により性的特性の関わりが異なる端的な例と言える。

創造性の概念は、アイデアの提出から、それを所産にまで高める過程まで含めて考えるし、マズローのように特殊才能の創造性と自己実現の創造性を分ける方法もある。さらに産業界で重視される発明発見的な創造性と芸術的な創造性を区別する見方もある。このように、創造性の概念はきわめて幅広いものである。しかし、現行の創造性テストは、拡散的思考に限定されており、従って、社会の目をひきやすい産業界の発明発見や研究上の業績をもって直接的にそれらを創造性とすることが多い。しかしこれは危険なことであり、色々な側面を含めた幅広い測定が必要となる。

女性の場合は、男性と比較して、社会的進出が阻止されていることが多く、創造性もその出現を抑圧されていると思われる。その点創造性が社会の目の見えない所で発揮されているのではなからうか。主婦の創造性は、日常生活上の色々な工夫の面で現れているであろうし、さらに、小説、イラスト、漫画、詩作等の著作の面においても、女性は多くの進出を見せており、それらの分野で男性とは異なった物の見方を提供している。社会の圧力が弱く、許容的な箇所、女性の創造性は現れていると言えよう。目につく社会の業績だけで創造性を評価するのは危険である。

Helson(1970) は、創造的な文学作品の特徴に性差が見られるとし、男性による著作の場合では、攻撃性、1つの状態からの転換を指向すること、英知、魔法性、力強い男性的特徴が表出されているのに対し、女性の著作の場合には、場面セットの重視、部分の分析の欠如が見られ、正しい関係に持ってゆこうとする秩序性を強調していると報告している。さらに、男性が家族同胞に関わるテーマを扱っていないのに対し、女性は、身近の例えば家庭的なものを作る工夫をしていると加えている。さらに、Milgram, Yitzhak & Milgram(1977) は、創造的活動と性的特性との関係を調査し、科学やスポーツは男性性と、ダンスや音楽や著作は女性性と関連することを見出ししている。創造性に関わる性的特性は一義的には述べられない問題であり、やはり評価される創造性の領域や側面によって結果は変わってくる。Milgram らの研究から推論されることは、あらかじめ目標が定められているものへ到達を究める態度では、男性性が、評価の基準が定まっていなかったような芸術分野であれば、女性性が、関わると言えるかもしれない。

しかし、ここで原点にもどり、男性性と女性性を区別することがどの程度意味をもつものかを再考する必要があるかもしれない。人間のもつバラエティ豊かな特性として、男女の性差という観点を捨てて、考え直しても良いのではなからうか。本来、男性性のすべてを男性が、女性性のす

べてを女性もつべきという固定した観念は捨てるべきかもしれない。

3. 創造的能力・所産と性差

創造性が広い概念であることは、前に述べた通りである。ここで、創造性の性差を眺める際に留意すべきことは、創造性をいかにとらえるかである。創造性を能力概念を中心にとらえるか、あるいは、所産までの人格概念を中心にとらえるかによって、性差が見られる。

能力面から言えば、性差は見られないと言えよう。いや、男性が秀れている面もあれば女性が秀れている面もある、と言った方が適切かもしれない。Raina(1969)は、言語性のすべてで、そして非言語的流暢性と具体性において男子の方が上まわるとしている。一方、逆に Hussain(1974)は、使用テストでは女子が男子より得点が高く、Gakhar(1974)も、小学5年生では、女子の方が柔軟性が高いとし、同じテストを用いた場合でも、被験者によって結果がまちまちのようである。

従って、ここでは単に男女のどちらが創造性に秀れているかの論議より、創造性を過程と所産に分け、男性と女性は、各々どのような過程を介在として、さらには、どのような側面で新しいものを生み出しているかに注目した方が有益と思われる。

例えば、Forisha(1978)は、女性においてのみ、創造的能力とイメージの鮮明さに関連が見られると報告している。さらに、彼は創造性をいくつかの側面に分けて考える必要性を説き、男女の創造性の形態は異なることを以下のように説明している。

つまり、女性は感受性が強く想像過程を多に活用し、気付きも多いが、男性は活動的であるものの、統制的で想像を抑制する傾向にあると述べ、さらに、男性は独創性を完成された産物へと高めてゆくが、女性の場合にはそれが結びつかないとしている。彼によれば、創造的能力、特に想像を駆使したアイデアの提出では女性が、創造的造成では男性が秀れているというわけである。そして、その理由として、女性の場合には、創造的産物が社会的評価の対象とならないことをあげている。

一方、人格特性との関連において、Ibrahim(1976)は、男性の独創性の出現においては固さ(rigidity)、拡散への強い欲求、カテゴリーの広さが媒介変数として関与していると主張している。

固さという面から言えば、機能的固着が創造的問題解決を阻む例から明らかなように、創造性とは矛盾するように思える。しかし、固さにも思考の面での固さと人格上の固執性があり、後者は問題の解明を目指し、深淵に追求し続けることであり、所産にまで高める創造的態度としては欠かせないものであろう。

以上のように、女性は過程の面で、秀れたアイデアを生む能力を秘め、一方、男性は特に所産までにつながる創造的態度で秀れていることを見てきた。次に、態度と関連して、創造への動機づけの面で眺めると、どのような性差が見られるかをさぐりたい。Katz & Poag(1979)の研究では、「創造的であるように」との教示を受けた場合には、男性の方が女性よりも創造性得点の上昇することが確認されている。さらに、Khatena & Dickerson(1973)の研究でも、独創性において、非訓練群では女性の方が男性より得点が高いが、訓練群では、逆に男性の方が女性より高い得点を取ると報告されている。こうしてみると、男性の方が創造へ容易に動機づけられると言え

よう。このあたりにも、男性が所産の面で秀れていることの原因があるのではなからうか。

また、創造性の発達における性差に関する研究もとりあげてみたい。Milgram, Milgram, Rosenbloom & Rabkin(1978)は、小学6年生と高校3年生を比較すると、男子の場合には、高校3年生の方が独自の反応を示すが、女子の場合には、逆に高校3年生の方が平凡で一般的な反応を示すと報告している。また、女子は年齢が上昇するにつれ多くの反応を示すが質が高いとは限らないと報告している。

このように、年齢が上昇するにつれ、女性を平凡な思考の持ち主に追いやる何らかの社会的要因がうかがわれる。その要因の1つとして、社会文化的背景が考えられる。Tara(1981)は、インドでは、男性の方が女性より創造性が秀れていると報告し、その原因として、女性が性に不一致な行動をとると否定的な反応を受ける社会文化的背景をとりあげている。

4. 女性における創造的所産の心理的障害

女性が所産の面で劣っている原因としては「成功への恐れ」が第1に考えられる。これに関しては、性差に関する社会心理学的研究を引用してみたい。

例えば、Horner(1969)の代表的実験がある。この実験では、女子学生と男子学生が学業で優秀な成績をあげた場合という設定で、後に起こりそうなことを想像させている。その結果、女性の被験者の中に、成功不安を示す回答が多く見られたとされ、女性には成功への恐れが存在すると主張されている。

次に、性的同一性との関連から見てみる。男性の場合には、男性としての性役割を形成することと、社会に出て成功することは両立する。しかし、女性の場合は伝統的な女性性役割を得ることと職業で男性顔負けの活躍をすることとは両立しない。つまり、結婚や子育てという伝統的に女性にふさわしい役割をとるか、それらを捨てキャリアウーマンとして活躍するのかの選択に迫られる。後者をとると、本来は成熟した大人として認められるはずだが、世間からは暗黙の冷たい視線を浴びせられることも多い。また、伝統的な女性性役割は、成熟した精神的に健康な大人の特性と一致しないものが多いと言われる。Schaefer(1969)は、創造的著作や科学的計画を教育している学校で、青年を被験者として調査したところ、創造的な活動を行っている女性はそうでない女性に比べて、自己記述的でありそれも好ましくない形容詞でもって記述する傾向にあり、男性の場合にはそのような傾向は見られないと報告している。

家庭の主婦におさまり、高い創造的可能性が埋もれたままの女性も多いのではなからうか。社会への貢献という面からも、さらには創造的な女性の自己実現にとっても、それを開花実現させることは必要であろう。

5. 将来の男女の創造性

現在は、伝統的な性役割がその明確さを失いつつある。以前は、男性にふさわしいとされた特性が女性にもあてはまることがあり、その逆もしかりである。

ここで、このような性役割の非明確化をどのように受け取るべきであろうか、女性の性役割はややもすると不健康と見られていた点からすると、喜ばしいことかもしれない。

しかし、これからはもっと違ったタイプの性役割、つまり創造的な性役割が必要なのではな

ろうか。もっと柔軟な、男性性と女性性が統合された人格が必要とされるのではないか。また、男性性、女性性という区分された定義自体、創造性の発現を阻止しているのではなからうか。

上田（1976）による精神的に健康な人間とは、一見矛盾する特性が統合された人間のことを言う。例えば、社会的独立性—社会的順応性、自発性—自己統制という対立概念が1つの人格の中で共存し統合されているのである。

これを、性役割の面にも当てはめて考えてみたい。つまり、男性性と女性性が共存し、場面によって望ましい方が優位に出せるような柔軟な人格である。

例えば、女性において社会で就業する際には、センスの良さ、感受性はもちろんのこと一般に男性性と言われる活動性、達成意欲、挑戦心を示し、一方、家庭では優しさ、憐れみなどの伝統的な女性的特性を示すのである。そして、それが自然にできる人格のことである。

以上は、特に女性の創造性発現について説いてきたが、結論的にはその人の真の欲求の実現、つまり自己実現を目指すべきであろう。

さらに、前にも述べたように、ステレオタイプの男性性を区別することが果たして適切であろうか。そのような区分を生み出す偏狭な考え方、あるいは創造性に必要とされる「あいまいさへの寛容」のなさが、自由な思考を妨げているとも考えられる。幼少の頃から、その性に合致した性役割を強いることは社会制度上では必要なことかもしれない。しかし、それによって創造的可能性が抑えられることも事実であろう。創造的発想において、早くから評価を入れた場合には独創的な発想が見られないとの報告もある。つまり、自分の性に合った行動を常に自分に課し、他の行動を認めようとしめない態度は、創造的可能性を閉鎖することになる。ステレオタイプにとらわれず柔軟な人格を認める態度が創造性育成には必要と思われる。

また、創造性の発揮において、その媒介となる過程あるいは発揮される領域が後天的ではなく生得的に性に備っているものであるならば、それらをさらに育む指導も必要であろう。

〈参考文献〉

1. Biller, H. B., & Singer, D. L. 1969 Sex role development and creative potential in kindergarten-age boys. *Developmental Psychology*, 1, 3, 291-296.
2. Forisha, B. L. 1978 Creativity and imagery in men and women. *Perceptual and Motor Skills*, 47, 1255-1264.
3. Gakhar, S. 1974 Creativity in relation to age and sex. *Journal of Education and Psychology*, 32, 133-139.
4. Gough, H. G., & Heilbrun, A. B., Jr. 1965 *The Adjective Check List manual*. Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press.
5. Harrington, D. M., & Anderson, S. M. 1981 Creativity, masculinity, and three models of psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 4, 744-363.
6. Helson, R. 1970 Sex-specific patterns in creative literary fantasy. *Journal of Personality*, 38, 344-363.
7. Horner, M. S. 1969 Fail: Bright Women. *Psychological Today*, November.
8. Hussain, M. G. 1974 Creativity and sex differences. *Psychological Studies*, 19, 126-129.
9. Ibrahim, A. S. 1976 Sex differences, originality, and Personality response styles. *Psychological Reports*, 39, 859-868.
10. Kanner, A. D. 1976 Femininity and masculinity, their relationships to creativity in male architects and their independence from each other. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 44, 802-805.
11. Katz, A. N., & Poag, J. R. 1979 Sex differences in instructions to "be creative" on divergent and nondivergent test scores. *Journal of Personality*, 47, 518-530.
12. Khatena, J., & Dickerson, E. C. 1973 Trainings sixth grade children to think creativity with words. *Psychological Reports*, 32, 841-842.
13. Lott, B. 1978 Behavioral concordance with sex role ideology related to play areas, creativity and parental sex typing of children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 10, 1087-1100.
14. Mackinnon, D. W. 1962, The nature and nurture of creative talent. *American Psychologist*, 17, 484-495.
15. Milgram, R. M., Milgram, N. A., Rosenbloom, G., & Rabkin, L. 1978 Quantity and quo-

lity of creative thinking in children and adolescents. *Child Development*, 49, 385-388.

16. Milgram, R. M., Yitzhak, V., & Milgram, N. A. 1977 Creative activity and sex-role identity in elementary school children. *Perceptual and Motor Skills*, 45, 371-376.
17. Raina, M.K. 1969 A study of sex differences in India. *Journal of Creative Behavior*, 3, 111-114.
18. マスロー, A.H, 佐藤三郎・佐藤全弘訳 1972 「創造の人間」誠信書房
19. Schaefer, C. E. 1969 The self-concept of creative adolescents. *Journal of Psychology*, 72, 233-242.
20. Suter, B., & Domino, G. 1975 Masculinity-femininity in creative college women. *Journal of Personality Assessment*, 39, 414-420.
21. Tara, S. N. 1981 Sex differences in creativity among early adolescents in india. *Perceptual and Motor Skills*, 52, 959-962.
22. 上田吉一 1976 「自己実現の心理」誠信書房

<Summary>

A review of the sex-
differences in creativity

Toshiaki Tanabe

Previous studies on creativity have revealed that creative persons are androgynous. And that androgyny means a response style with both high masculinity and high femininity.

It has been demonstrated that children whose behavior does not closely approximate sex role expectations are more ideationally fluent than children who conform, and boys with a high preference for their opposite sex role and low orientation towards their own sex role are more creative than any other type.

But in the case of adolescents if we distinguish between the ability to create and the creative output, it appears that women are nearly equal to men in ability but creative output is linked especially with masculinity. Besides, we must insist that the differential personality patterns underlying the expression of creativity are mediated by sex. This does not mean that femininity is no use for creativity. On the contrary some traits in femininity are indispensable for creative activity. For example susceptibility is necessary for the first step in creative problem solving. Creativity should be apprehended as including both ability and production together.

It can be denied that the need for creative output in women has been suppressed by some environmental effects. We should help women to realise their potential creativity. be self-sufficient persons.

高松短期大学研究紀要

第 15 号

昭和60年3月15日 印刷

昭和59年3月25日 発行

編集発行 高松短期大学

〒761-01 高松市春日町960
TEL (0878)41-3255

印刷 高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地